



## 海外から 研修員に聞く



**イルデヴェール・  
オノリー・クワウオ  
チャワラスウさん**  
(トーゴ共和国)  
Mr. Ildevert-Honore Kouawo  
Tchawalassou  
トーゴ共和国農業漁業省  
農村開発計画局  
農地復興計画事業部  
農業用水灌漑事業担当官

JICA帯広「畠地帯における農業基盤整備コース」  
(2006年5月28日～8月19日)で研修。

「帯広、好きです」

トーゴから国際線の飛行機は飛んでいない。隣国ガーナにあるJICA事務所の職員がトーゴまで迎えに来てくれて一緒にガーナの首都アクラまでバスで4時間。アクラに1泊して翌日、中東のドバイを経由してバンコク、東京、そして帯広となる2日間の旅であった。「寒い」、「遠い」と思いながら降り立った人影まばらな帯広空港に「えっ、ここが空港?」と思った。心細かった。そもそも市内に向かうにつれて道を行く人の姿もふえてきて一安心。「今はもう、国で仕事をしている時のような感じで毎日の研修をこなしています」。

首都のロメは小さい町です

そうは言ながら「トーゴの首都はロメですが、人口は70万人ちょっとです。国全体でも500万人しかいません」(編集部注:2004年推定)首都は海に面しているので海岸は週末、水泳の人々で賑わうという。他にはサッカーやボクシングに人気がある。

トーゴは南北に細長い国である。雨が多くて暑い南部の海岸地域(潟や沼沢が多い)、高原地帯、中央地域、カラ地域、とその先サンバナ地域と5つの地域に分かれ、隣国のブルキナファソへと続いている。北部の乾燥地帯では年間の降水量250-300mm程度で干

ばつも見られるのに対して南部地域では1,200mmにも上る。気候は、オノリーさんの言葉をかりると、大きい雨季(3-7月)、小さい乾季(8-9月)、小さい雨季(9-10月)、大きい乾季(10-翌2月)という変化を辿るが北部は乾季の続く地域もある。

お米は主食のひとつ

メイズ(白トウモロコシ)を挽いた粉を丸めて煮炊きするのに次いでお米が主食の第2位にある同国では米作りを奨励している。「米を作ろうと、西部を流れるスイオ川沿いの地域の灌漑プロジェクトを進めています」。

サブサハラ気候のもと国民のほぼ56%が若干の市場に出す作物のほかは自給自足の農業を営む農民である。コーヒー、ココア、綿花が輸出額の40%を占めている。燐鉱石の生産は世界第4位である。



皆さんに感謝

「決まり切っていると思われるでしょうが、日本政府、JICA、帯広市民、コーディネーター、OBICスタッフなどに心からお礼を申し上げます」。特にトーゴにはJICAの事務所がないのにトーゴまで声をかけてもらったのが嬉しかったそうだ。

1960年フランスの信託統治東トーゴランドから1960年独立。通貨はCFA(セーフアーフラン)で、1ユーロ(Euro)=656CFA。



JICA帯広、館長室で

## NRCニュース

### 北方圏センター 「開発教育ファシリテーター養成事業」始まる

開発教育の実践者であるファシリテーターの養成を図ろうと、北方圏センターでは、初めての取り組みとして「開発教育ファシリテーター養成事業」を実施する。参加者はレポートや書類等の審査で選ばれた10名。

10月7日、8日には第1回研修会が開かれ、開発教育を専門とする北海道教育大学教授・大津和子さんからファシリテーターの基礎やあり方などを学んだ。12月末のベトナム、カンボジアへのスタディツアーでは、次代を担う子供たちにスポットを当て、現地の学校やNGO団体、国際協力の現場などを訪問するフィールドワークを実施する。帰国後はその成果を生かして独自の教材づくりに取り組むことにしている。



意見を出し合う参加者たち(中央・大津教授)

(国際協力部)

### 中学2年生、外国の講師たちに活発に質問－国際理解教室開催－

10月19日(木)の午前、札幌市立新川西中学校の2年生が訪れて国際理解教室が開かれた。同校では一定の期間を決めて週2時間づつ総合学習の時間にあてて様々なテーマに取り組んでいるが、この日北方圏センターを訪れたのは「国際理解コース」に参加している20名と引率の奥平先生。



韓国のアンさん(中央)を囲んで

はじめに北方圏センターについて、創立以来、寒冷地での快適な暮らしづくりに800年の歴史がある世界の北方圏諸国／地域に生活や文化の面での工夫を学んで紹介してきたことや、世界を知って仲良くしていくこという国際交流、世界の途上国などを支援する国際協力活動なども行っていることが話された。続いて、講師をお願いした韓国のアン・ギホンさん(北海道大学大学院)、中国の劉建光(リュウ・ケンコウ)さん(小樽商科大学大学院)と曹迪(ソウ・テキ)さん(北海学園大学大学院)の3名の留学生と北海道国際課の国際交流員シェイン・クルマイクさんを中心にグループに別れて話し合いをした。話したいことを前もって準備、勉強したきたということで、生徒たちは時には英語も交えて活発に講師の国のことなどを質問、講師たちも率直に答え、どのグループも話が尽きない様子であった。



講師4名を前に3班に分かれて開始

(交流部)